

平成二十五年元旦

曙や雲の通い路初の日の出

赤富士と青富士交互初日かな

元日やサンテミリオン一九九六

海苔の香は妻の国ぶり雑煮椀

太尾神社で

初詣三筋なす人小社

小社も人三筋なす初詣

昼酒寝正月

数の子を噛む正宗はぬるき爛

昼酒にとぐろ巳年の寝正月

スポーツジム始め

賀詞述べて温水プール飛沫立つ

強風に水汲む凧を抑えかね

風強し凧の揚げ手も子から親

一月十四日、大雪の成人式

太尾緑道をアリーナに向かって急ぐ娘一人

振袖の雪蹴立て行く若き息

振袖の一人霞める雪の道

楠の香や雪に折れをる枝ありぬ

横浜アリーナ前、万余の振袖集う

振袖の群れて華やぐ雪の道

大きな蠟梅の庭木が道路に枝を張り出して

蒼天に蠟梅満つる真下に居

一月三十、三十一日、熱海『何でも書こう会』合宿

伊豆山神社

千年の恋の石壇梅咲きぬ

二月になっても朝は暗い

今日二月朝の六時はまだ明けず

逃げる二月捕まえんとて立ち止り

大倉山梅園

八重野梅ひとり咲きをり人疎ら

三桮の銀の冬芽に薄日かな

三月一日 昼春一番、夜一転前線性の強い雨

春一番過ぎて篠つく雨となり

蕎麦手繰る暖簾の外は春の雨

娘居てさりげなく立つ弥生雨

行く人の肩も無防備春の雨

大倉山梅園、梅の盛り

紅白の梅並ぶ撮り葉書にす

白梅を鳥の影越ゆ青き空

春弥生

還暦を控へし妻の雛飾り

三桮の山吹色の一二輪

菜の花の葉の色浅し日差しかな

妻の手のパセリ葉撫づ弥生かな

バンスターズ彗星といふ彗星接近

彗星の見えると聞きて春茜

ベランダ

生き延びて二歳の春の日日草

三月十日 煙霧

霾るや空の怪異を妻に告げ

三月十日 東京二十五・二度夏日

新しき舗道の匂ひ春暑し

沈丁花早咲き匂ふ半日陰

三月十四日 渋谷駅前

袴着に朱色のリボン卒業期

雑踏に袴着もゐて卒業期

西湘PA前の海岸 釣り人鵑

釣り人と親しき鵑春の浜

裾野山荘

雪柳卷毛のごとく跳ね踊り

雨模様巣箱を懸ける手を早め

三月三十一日 友あり遠方より来る

浜離宮

歳経たる離宮の松の若緑

後になり先なり行く花の道

花冷えに遠来の友薄着ゐて

墨田公園桜 水上バス

花冷えや吾妻橋過ぎ首を出し

大倉山雑詠

濃し淡し芽吹き of 樗謎めきて

餅草の匂ひ祖母の味もして

餅草を摘む指先をそつと舐め

蒸し暑い

だしぬけに花桐見えて雨上がり

四月十四日〜十七日、八重山諸島

掌に星砂一つ夏光る

淡青と藍の交じれる夏の海

四月二十四日 体験乗馬

ネロ号の鞍に跨り若葉風

若葉雨馬の鼻面柔らかき

格好良い若い女性

コードバン肩に闊歩し風薫る

武者幟信玄公の謂問ひ

声あらばさぞや楽しき金魚かな

薔薇誉める柔らかき声かへりきて

名と姿合はぬ処に紫蘭咲き

神奈川工科大学

学生の八十人ゐて夏の教室

壁に守宮発見

高階に尾のない守宮壁を抱く

意気やよし守宮守るは三百軒

群青の額紫陽花の咲き初めり

青梅の尻尖りゐる葉陰かな

五月十一日 東京

東京大神宮 飯田橋

白もまた紫蘭と云ふや宮の前

神楽坂

額の花路地に明るし小糠雨

友からの写真に

縞蛇の鯉を横切る波紋かな

裾野山荘

株呉れし笑顔の浮かぶ皐月花

一声で退散闇夜のほととぎす

青梅の尻尖りゐる葉陰かな

鶴見川

川風や泰山木花接写せり

盆

紹の衣思いがけなく速足に

記録的猛暑の夏 四一度を記録の処も

ゼラニウム黄葉も萎れて猛暑かな

裾野山荘も暑い

目覚ざむれば汗もしとどに夜半の蟬

ステテコで存分水撒く楽しけり

鶴見川で防災訓練 第三一普聯

炊き出しのカレーの昼餉震災忌

九月三日、鶴見川土手、雨の降る前に虹

ひんがしに虹立ちてより天気雨

凄雲

黒雲の隙間の澄みて鱗雲

徐々に日が差し込んでくる

寄せ植えに日の差す居間や仲の秋

九月一六日 台風一八号過ぎ、凄く夕焼け

野分過ぐ燃ゆる如くの天地かな

十月五日 ツクツク法師も

高階に木犀の香や雨模様

十月句会 十月八、九日 御岳吟行、欠席

十月九日 糸魚川で35.1度観測史上十月最高気温

吟行の便り口惜し秋暑かな

処理場屋上庭園で近所の保育園運動会

「位置について」掛け声かすか運動会

コスモスや薄茶の猫のまどろめり

十一月、鉢植えの水引、全然変わらない外観

咲いて早ふた月経つや水引草

十一月八日 立冬は雨、翌日快晴 富士山きれいな冠雪

遠富士や朝日に染めて冬来たる

落ち葉掃き箒の主の首の揺れ

ベランダに十個ばかりの柿を干し

暦の上ではディセンバーでもハートはサバイバー

典子足指骨折、十一月二十四、二十五日熱海湯治

露天風呂暦の上では十二月

曇天に枯枝静か湯のけむり

アイソン彗星、太陽風で崩壊

期待せし彗星果てて十二月

電飾の道押され行く十二月

和歌山の友人より物凄い柿届く

到来の秀の富有柿十ばかり

大倉山散歩

蒼天に小ぶりの柚子の鈴生りに

代々木公園

銀杏散る金の波間に影を引き

一片も散らず名残りの照紅葉

鶴見川の上流

山茶花の散り敷いていある道を行き